

# やすらかに皆川先生・河野先生



(故 皆川 國雄 先生)  
2009年10月28日(逝去)  
(享年82歳)



(故 河野 兵衛 先生)  
2009年10月7日(逝去)  
(享年81歳)

皆川國雄先生、河野兵衛先生の顔写真

# 厚生協会だより

2009年11月21日  
第 298 号

発行  
(財)宮城厚生協会

〒985-0835  
宮城県多賀城市下馬  
二丁目13番7号  
TEL 022-361-1113  
FAX 022-361-1124  
発行人：長澤清光

10月に逝去された皆川國雄先生(坂病院)・河野兵衛先生(長町病院)の生前の多大なる業績に感謝しつつ、両先生を偲ぶ追悼特集を掲載させていただきます。(事務局)

## 皆川先生、 河野先生を偲んで

宮城厚生協会

理事長 水戸部 秀利

宮城厚生協会の創成期に参画し、協会の発展、特に外科の礎を築いた二人の大先輩と、本年10月別れることになりました。まるで二人で申し合わせたように旅立たれました。皆川先生は、5年前に脳梗塞で倒れ、重度の意識障害をかかえ、ご家族の献身的な介護を受けながら闘病生活を送ってこられました。気道感染が悪化し坂総合病院に入院していました。10月28日、急変

し息をひきとられました。河野先生は、3年前にA型急性大動脈解離で倒れ一時心肺停止状態になりましたが奇跡的に生還し、翌年には本人の一大決意でリスクを伴う根治手術を受け、この難関も見事に乗り越えました。長町病院の職員の中では「不死鳥」という表現も飛びかかったほどです。しかし本年10月3日、脳出血で広南病院に入院され、誰しも再起を信じていましたが10月5日急変し、10月7日夜、亡くなりました。

両先生とも1950年代初めに東北大学医学部を卒業し、皆川先生は坂病院、河野先生は長町病院を舞台として、半世紀余り外科医として、病院管理者として、そして社会変革の活動家として活躍されました。定年後も、健康が許す限り、外科外来の診療に協力していただきました。協会設立当時は、外科も未分化で設備も不十分な時代でしたが、貪欲に学び周到に準備しスタッフを組織し、難しい手術にも果敢に挑んだ姿は武勇伝のように語り継がれています。こよなく「お酒」を愛したのもお二人に共通で、それに関する逸話も数多く残されています。

皆川先生のベトナム訪問記録、河野先生の全日自労検診記録など、当時の写真はセピア色となっても人権と平和に寄せられた両先生の思いは色あせることはありません。両先生の究極の願いであった社会変革の課題も、核廃絶が語られ、戦後60年あまり続いた保守政権も瓦解しつつあり、時代の変化の兆しが見えてきました。それはあくまでも兆しですが、この変化を後戻りさせないことが残された私たちの使命だと思っております。

先生たちの生き様とその哲学、その厳しさの中にやさしさをたたえた人柄とメッセージは、私たちの心に、深くいつまでも生き続けていくことでしょう。

お二人の生前の奮闘と業績に感謝し、残された私たちは、それを引き継ぐ決意も込めながら、ご冥福を祈ります。

# 2009年度 上半期収支結果と下半期の課題

専務理事 長 澤 清 光

役職員の皆さんの奮闘に感謝申し上げます。

2009年度の課題は、「公益法人制度改革」に伴う厚生協会の法人移行の具体化に向けた道筋をつけて、遅くとも2011年3月期には健全な財務内容に転換できる展望をつくる土台を築き上げることです。

## 1、2009年度の 目標は当期損益で 黒字を作ること

厚生協会が今年度事業・経営活動で必ず達成しなければならぬ目標は、年度決算で当期損益の黒字を作り出すことです。これができないと公益法人制度改革に伴う、法人格移行の前提条件が財務的に崩れてしまう厳しい状況を迎えます。上半期は外来患者の増加もあり、前期同期実績か

ら僅かではありませんが前進を作り出しています。しかし、入院収益が予算目標から大幅に乖離し、厳しい赤字決算となつています。また上半期の到達自体にも入院稼働等の不安定な内容があり、それが下半期経営に影を落としています。

## 2、上半期経営到達の特徴

上半期経営到達は法人全体で事業収益70億7百万円を確保しましたが、予算に1億33百万円届かず、経常損益は▲90百万円の赤字、当期損益では▲1億4百万円の赤字になりました。要因は、入院収益で予算比▲2億3百万円、前年比▲1億14百万円と予算目標、前年実績からも大きく後退していることです。

外来収益は予算比30百万円、前年比69百万円と予算

比、前年比ともに前進する到達になりました。介護収益も23百万円の予算超過、前年比でも15百万円の収益増となりました。

事業費用関係では、予算対比で38百万円ほど下回りました。職員の皆さんの努力で材料費が予算を49百万円、経費で27百万円下回り、費用全体を圧縮した反映です。しかし人件費は予算を34百万円超過しています。

入院収益が予算目標から大きく後退していることが、現在の厚生協会の経営状況を困難にしている大きな要因です。もう一つは、事業所毎の経営状況に大きな変化が生じていることです。各事業所で予算目標達成に向けて努力していますが、上半期の事業収益と経常損益の到達は以下の通りです。事業収益では予算

目標に届いていない事業所が増え、更に前年実績から後退している状況が生まれています。この状況が下半期の経営見通しを不安定なものにしています。

## 3、各病院・事業所の状況

■坂総合病院は、当期利益で予算に65百万円、事業収益で予算に77百万円かず、外来収益で予算を46百万円超過するも入院収益で予算に1億38百万円届かなかったことが大き

です。

な要因です。入院は一日当335人の予算に対して327・5人の到達であり軽症化のため入院患者の確保につながらなかったこと、日当円が予算に到達しませんでした。事業費用全体では予算を10百万円下回るも人件費で35百万円予算超過、入院稼働目標と外来予算を上回ることが必要です。

■長町病院は、入院、外来収益とも予算を下回る到達となりました。入院は一日当13

【表1】 上半期法人損益計算書

単位：百万円

科 目	累計実績	構成比	累計予算	増減額	前期実績	増減額
(入院収益)	3,747	53.5%	3,950	▲203	3,861	▲114
(外来収益)	2,167	30.9%	2,137	30	2,098	69
【医業収益】	6,240	89.1%	6,395	▲155	6,255	▲15
【介護収益】	762	10.9%	739	23	747	15
(事業収益)	7,007	100.0%	7,140	▲133	7,004	3
【人件費】	4,593	65.5%	4,559	34	4,492	101
【材料費】	1,171	16.7%	1,220	▲49	1,189	▲18
【経費】	895	12.8%	922	▲27	928	▲33
【リース料】	103	1.5%	107	▲4	106	▲3
【減価償却費】	349	5.0%	349	0	380	▲31
(事業費用)	7,111	101.5%	7,157	▲38	7,095	16
(事業利益)	▲105	-1.5%	▲17	▲88	▲91	▲14
【事業外収益】	66	0.9%	52	14	50	16
【事業外費用】	51	0.7%	49	0	51	0
【経常利益】	▲90	-1.3%	▲14	▲76	▲92	2
【特別利益】	0	0.0%	0	0	0	0
【特別損失】	14	0.2%	0	14	17	▲3
(当期利益)	▲104	-2.3%	▲14	▲90	▲109	5

【表2】 事業所別 予算対比 / 前年対比

単位：百万円

	事業収益			経常損益		
	実績	予算目標 前年実績	増減	実績	予算目標 前年実績	増減
坂合計	3,833	3,907	▲74	▲16	50	▲66
		3,851	▲18		10	▲26
長町合計	1,053	1,073	▲20	▲25	0	▲25
		1,045	8		7	▲32
古川	479	480	▲1	▲27	▲34	7
		494	▲15		▲59	32
泉	675	716	▲41	▲62	▲40	▲22
		663	12		▲81	19
診療所合計	336	340	▲4	▲1	▲4	3
		341	▲5		0	▲1
歯科合計	168	181	▲13	▲20	▲12	▲8
		165	3		▲18	▲2
訪問看護	255	243	12	29	24	5
		248	7		29	0
訪問介護	197	191	6	28	17	11
		186	11		19	9
事務局・公益	11	9	2	▲11	▲16	5
		11	0		▲12	1
協会合計	7,007	7,140	▲133	▲104	▲14	▲90
		7,004	3		▲109	5

0人をめざすも126・2人とどまりました。内科指導医を含めた安定的な医師配置の困難さが、病床稼働にも影響を与えています。入院日当円は予算を超過しており、患者数予算未達が収益予算未達につながっています。10月以降の130床稼働が経営改善のポイントになります。

85・1人と届きませんでした。小児科再開に伴う患者増の見込みに乖離、小児科への期待は強く、診療再開を知らせるなかでどれだけ伸ばすことができるかがカギとなっています。入院は、一般病棟、介護病棟とも予算に届かず、患者数は予算を確保していませんが、ベッド稼働率を維持することが重要です。

■古川民主病院は、事業収益が予算目標を1百万円ほど下回りました。外来収益は予算を超過しましたが、患者数一日187人の目標に対して1

■泉病院は、事業収益で予算に41百万円届きませんでした。入院は上半期に病棟改修も行い病棟の再々編をしまし

【表3】 診療所群(詳細) 予算対比 / 前年対比

単位：百万円

	事業収益			経常損益		
	実績	予算目標 前年実績	増減	実績	予算目標 前年実績	増減
くりこま	66	66	0	1	1	0
		64	2		1	0
中新田	61	62	▲1	▲3	▲3	0
		72	▲11		▲3	0
錦町	62	61	1	4	2	2
		62	0		3	1
健診センター	36	39	▲3	▲2	0	▲2
		37	▲1		0	▲2
福田町	18	17	1	0	▲3	3
		17	1		0	0
若林	26	31	▲5	▲6	▲2	▲4
		26	0		▲5	▲1
北部	67	64	3	4	2	2
		64	3		4	0
診療所合計	336	340	▲4	▲1	▲4	3
		341	▲5		0	▲1

■診療所は、昨年度と同様に赤字と黒字の事業所が鮮明となつています。中新田民主病院、若林クリニックの黒字化が急がれます。歯科群は、前期より収益の確保が予算に届きませんでした。病棟運用の見直しで徐々に改善傾向にあります。下期稼働目標73床を安定的に確保する取り組みが、今後の経営改善につながります。

4、下期の改善課題

上半期の月平均収益は11億68百万円、材料費比率と固定費額から逆算した損益分岐点月額収益は11億88百万円であり、黒字化まで月額20百万円の増収が必要です。大きく収益減少が続く中で、特に人件費が前期比で1億1百万円増加しており固定費増加が収益確保につながらずに、収益・

費用のバランスをいっそう崩しています。

事業収益(特に医業収益)の予算未達成の状況が続くと、今後の経営活動は厳しい局面に陥ります。全ての部門・職場で下期職場目標の見直しと確認を進めながら、事業収益の増加と材料費、人件費の適正管理を強め、粗付加価値の増加にむけて取り組みましょう。そのために、全職場で効率的な業務執行に心がけ、一部に慢性化している長時間労働を早急に改善し、「超勤手当」削減を進めなければなりません。

下半期の医療・経営活動の成否は、2010年度以降の公益法人制度改革に伴う法人移行が可能になる事業経営構造をつくれるかの試金石となります。部門・職場の話し合いを大事にしながら、私たちの民医連医療・介護事業を守り、発展させる気概を持って大いに取り組みを強めましょう。



皆川先生を偲んで

父親のような温和な存在

坂総合病院外科 小熊 信



理事長として永年勤続職員を表彰する皆川先生



医局でくつろぐ 皆川先生1960年頃

故 皆川國雄先生の略歴

- 1928年 1月26日  
宮城県柴田郡大河原町に生まれる
- 1953年 3月  
東北大学医学部卒業
- 1954年 5月  
宮城厚生協会坂総合病院に入職
- 1958年 3月  
宮城厚生協会理事
- 1962年 8月  
坂総合病院副院長
- 1967年  
宮城県民主医療機関連合会会長
- 1968年 12月  
全日本民医連の推薦で「アメリカのベトナム侵略戦争犯罪第3次調査団」の一員としてベトナム訪問。「インドシナ人民支援世界大会(パリ72年2月)」「第3回アメリカの戦争犯罪告発世界大会(コペンハーゲン72年10月)」
- 1976年 12月  
菅原病院院長。1977年6月松島医療生協海岸診療所所長。
- 1978年 7月  
坂総合病院院長
- 1984年 7月  
宮城厚生協会理事長
- 1993年 4月  
宮城厚生協会名誉理事長
- 2009年 10月28日  
永 眠 (享年82歳)

皆川先生と初めて一緒に仕事をさせていたいただいたのは約27年前で、私はまだ外科研修医、先生は50歳代半ば頃でした。

当時先生は、重責である院

長職をこなしながら外科医の仕事もされていましたが、外科医としての先生は今日の外科医とは違い、幅広い分野の手術を手がけておられました。

研修医であった私は、乳腺や泌尿器科の手術をたびたび一緒にさせていただき、機会ごとにいろいろとご教示を賜り、私のその後の外科医としての基盤作りに大きな影響を与えてくれました。

先生にまつわる若き時代のエピソードをその当時の看護

師から伺っておりましたが、私と一緒に仕事をさせていただいた50代半ば頃の先生は、すでに外科責任者としての立場を後進の横山先生に委ねつつあったためか、私たちが若い医者たちには非常にやさしく接せられ、まるで父親のような温和な存在に感じられました。

先生の若き時代に革命的な理念に傾注しておられた時とは違った一面を見ていた感じがし、そのような人間味豊かなお姿も先生のもう一つの真

なる姿ではなかったかと、今では感じられる次第です。

その後も私は公私共々大変お世話になり、大病を患った折にもたびたび励ましの言葉をかけていただき、大変心温まる想いを抱いたことを今でも思い出します。

長町病院初代外科の河野先生のご逝去と時を同じくした先生の急逝は、厚生協会外科のまさしく基盤を作られた第一世代の終焉を感じさせるものです。

しかし残された私たちは、先生の医療に関わる崇高な理念や外科医としての姿勢を継承し、その流れを途絶させることなく、さらなる外科グループの発展に尽力していききたいと思っています。

先生、長い間大変ご苦労さまでした、安らかにお休みください。



# 的を射た『皆川語録』

元坂病院外科外来看護師 佐藤 としよ

皆川先生が旅立たれた。5

年前倒れられた時、「高度意識障害」が残ると聴いて会話は望めないかなとか、お別れの時もあるのかと覚悟したが、その後看護のお手伝いを出来ずに過ぎ、奥さんや子供さん達には申し訳なかった。

私は、民医連も何もわからないままに紹介され就職した。故菅原千代子看護部長に『あなたには外科勤務をしてもらいいますから寮に入ってください。』と。24時間拘束だったのを後で気づいた。なぜか勤務交代の合間は外科外来に戻り、通算25年余。私が一番皆川先生のご指導を受けることが出来たと光栄に思い感謝しています。

以前、インターン医が外来に来た時のご指導と一緒に聞き、昼休みに手術の系結びの練習をした。私が労組で「地区労青婦部常幹」を担当した時には、系統的に勉強するようにと故河野兵衛先生にも本をお借りしてご指導を受けた。『読んだら書く、理解に間違いがないか、再度読み直す。』と。また『返事は1回ハイッ!』『無駄な動きはしないで機敏に』『両手を使いなさい』『診察室が3室になったら』『3室を聞く耳の訓練を!』気配りを忘れないようにの意味。「患者本位」と職員気配りを注意し、12時には診療を終わる、等々。

殆どの看護師も体験した。野村監督のぼやきではないが、それらを『皆川語録』として誰かがA4ノートに書き出した。そして書き足しているのに笑い転げ、後に『皆

川診療介助の手引書』となったが、そのノートの行方は誰もわからない。

先生はお酒が好きで理由をつけ他の先生方も巻き込んでコンパをした。みんなに冷やかされ大いに笑いコミユニケーションを深めた。忙しかったが楽しい職場だった。

病院の拡張とともに職員も多くなり、ある時、青年が先生の後をつけて来て、用事があって声をかけるで

もなし、気にして歩いていたら一緒に医局に入り、『おはようございます』。実は研修医だった。外来に来て『病院も大きくなったなあ。』としみじみ話されていた。

先生、ご指導ありがとうございました。安らかにおやすみください。



皆川先生65歳の誕生日祝 外科外来スタッフと (皆川先生宅にて)

河野先生を偲んで

思い出よもやま話

長町病院付属クリニック外科 横山成紀



長町病院三期建設後の手術風景。  
河野先生（背右側）



長町病院創立20年祝賀会。  
挨拶する河野先生(右)と  
皆川先生(中)

「年賀状」 わが家が喪中だった時、河野先生は私に出せなくて残念がっていました。それを頼んでこっそりいただきました。それはとても細かく色も鮮やかで思わず「わーすごい！この細いところも彫ったのですか？何回刷ったのですか？」と聞いてしまった。にこやかにそして満足そうに「この部分が上手くいかなかったんだ。10回ほど彫って刷ったかな？」と言いながら、この絵の背景について、またひとしきり話すのでした。あまりの出来栄えに拡大カラーコピーして医局に貼り出しました。今は遺作となっていました。

「皮膚科」 私が診察に苦勞してあまり考えずすく先生のところ症例を相談に行くとき、すぐ机の引き出しに置いてあ

る皮膚科の教科書を取り出して『これこれ、これだろう。』と。その本に載っていないとまた本棚に行つて探して『これでしよう。』と教えてくれました。本当にお尻が軽く物事の探究心が旺盛でした。妥協しないところがあるんですね。

なさっており、この年齢になつてまた語学を学んでそれを話すのは、とても凡人の我々には真似のできないところですね。『現地で通じましたか？』といやみ半分に聞いてみた事があります。ニヤニヤしながら『他の観光客から道を尋ねられたよ！』と得意げに話すのでした。

「読書」 毎週1回本屋さんか注文取りに来ます。先生は必ず何冊か注文なさいます。あの読書欲には本当に負けてしまいます。読書時間も速いのでしょうか？さらに診療の合間にはフランス語の辞書をせっせと細解いていました。フランスにも数回ホームステイ

「臍頭十二指腸切除術の紙芝居」 臍頭十二指腸切除術、所謂、チャイルドの手術は腹部外科時問でもその技術でも最高の手術です。これを先生は数日間の勉強に基づき、その「こま」こまを頭に叩き込むと同時に、紙芝居に

故 河野兵衛先生の略歴

- 1929年3月31日 広島県安芸郡倉橋島に生まれる
- 1955年3月 東北大学医学部卒業
- 1957年4月 宮城厚生協会坂総合病院に入職
- 1962年1月 長町病院転勤院長
- 1962年 全日自労集団検診を開始し職場や地域と連携し健康を守る運動を強化
- 1964年6月 宮城厚生協会理事
- 1982年 長町病院院長を長谷部栄祐先生と交代
- 1988年3月 定年退職長町病院嘱託医となる
- 2006年1月 嘱託医退職
- 2009年10月7日 永眠(享年81歳)

# かけがえのない恩師

元長町病院看護師 板橋 龍子

書いて他のスタッフにも分かりやすく解説し手術の進行によって次々とめくっていったと言われております。そのおかげで8時間に及ぶ最初の手術は大成功、現在も丈夫であるとお聞きしました。凄い気力であります。その手術に対する殺気が感じられるほどです。もちろん若い時のエネルギーでしたが。

「頸部リンパ節」先日、頸部リンパ節の方がいらっしやいました。なかなか診断がつかなかったようです。ある時この事が話題になりました。『今は頸部リンパ節は耳鼻咽喉科紹介なんだって。昔は「リンパ節結核」と言って、胸の病と決まっていたのだが最近耳鼻科なんだってネ。インターネットで「今日の診療」を開いてご覧。ちゃんと書いてあるから。』と言われました。最新の医療を追求していく姿勢は変わりません。そして、インターネットにも果敢に挑戦しているこの姿は年を経る事はありません。電子カルテに移行してもスムーズに取り入れて操作しております。

9月末日頃に、最近言葉がもつれる、前より歩行が困難になったようだと言いつつ、そのうち、先生宅にお邪魔しようと思っていた矢先の訃報で、しばらくの間ただ茫然自失し途方に暮れました。

思い起こせば、先生とともに歩んだ歳月は、私にとつて先生は医療分野だけにとどまらず、物の見方・考え方・生き方まで含め、育ててくれたかけがえのない恩師でした。先生の思い出を語るには、

1962年1月の赴任から新病院建設までの、約11年あまりの医療活動を抜きに語ることはできません。

その活動方針は①診療科目を内科・外科とし、外科新設のため増築する。②検査室設置など医療内容の充実をはかる。③医療活動部を設け、保健婦、ケースワーカーを置く。④従業員の生活と権利を

守る立場から、医師を除き、一律三千円の賃上げをする。⑤失対労働者の集団検診に定期的に取り組む。⑥地域活動を強め、生活と健康を守る会の組織化を強める。⑦労働者、

地域住民との結合を強め、社会保障闘争などのたたかいを強力に進める。というものでした。

後に、この医療活動方針は、全日本民医連が全国的に呼びかけた「医療活動方針づくり」のさきがけだと言われました。そして、この医療活動がその後の長町病院発展の基礎になったと思います。

内科、外科を標榜して進められた改築も、手術室といえは10畳ほどの広さで充分な機械も置けず、この中で当初は全身麻酔器のないまま(どうしてもの場合は坂病院から借用した)、腰椎麻酔で腎臓摘出、前立腺摘出、胃部切除、

低温麻酔による甲状腺手術、頭部外傷の開頭手術を無事施行しました。

当時の設備状況や看護師のレベル問題、術後看護の力量不足の問題を抱える中で、このような手術を施行した事は、外科医としての情熱を感じさせ、驚きしかありませんでした。看護師側も器械に煮沸消毒が全てで、手術時間も準備や後片付けに時間を要し、かなりの労働時間となっていました。

また、失対の集団検診は医学生生の協力を得て、夏冬問わず、外にうって出る厳しい活動でした。他の労働組合や地域住民との社会保障のたたかいを連携し地域に根ざした活動が展開されました。先生の活動の姿は、職員にとつて学ぶものが多くあり、先生は誰にでも声をかけ、私たちの要求に耳を傾け目を向ける姿勢

は今でも思い出されます。職員とともに地域に根ざす活動のあり方の原点がここにあったと思います。

今年3月で80歳を迎えた折、自宅にお邪魔して長い時間お話したのが最後の別れになってしまいました。仕事から離れたお話を、もっともとしたかったと思いますが募りません。

長い間ありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。



手術1000件突破式典・祝賀会「外科歌(5万節の替え歌)」を披露する河野先生(左)

# 笑顔の華寧ちゃん

さわやか **エッセイ**

協会事務局 赤間 政子

孫が生まれ自分の子育ての時の事を思うと、時間が無く子どもに優しく接する事もなく、子どもにはもう少し優しく接すれば良かったとの思いが脳裏をかすみます。

## 『ばあちゃんのようにになるよ！』

孫の華寧（はなね）が成長するにつれて、笑顔が絶えない生活になっています。甘党の華寧ちゃんはいじちゃんから、『虫歯になるよ』と言われると、『いじちゃん、ティッシュ』と言い口からチョコを出し、『そんなに肉ばかり食べるとばあちゃんのようにになるよ！』と言われ、3歳の華寧ちゃんの自尊心を傷つけてしまったのかなと夫は言っています。

このようにおしゃべりの華寧ちゃんになったのは、乳銀杏保育園に入所出来たおかげです。数ヶ月前までは母親と毎日二人で過ごしていました。

華寧の成長（言葉を話すことが出来なかったこともあり）の事もあり、保育所入所が一番と考え一歳6ヶ月の時、保育所入所申し込みに行ったのは良いのですが、待機者児童が多数いて一歳の時は入所出来ませんでした。二歳になる頃ようやく一時預けの保育所に入ることが出来、そして今年の4月ようやく入所出来ました。保育所は集団保育が出来、ワガママ華寧にとっては、同じ歳の仲間と生活することは本当に良かったと思っています。

保育所でインフルエンザにかからないよう手洗いを丁寧に教えたところ、家でするように丁寧に洗っていたら後ろの子に早く終わらない華寧ちゃんは手を噛まれてしまいました。でも、何にも無かったような顔をしています、母親の方が心配していました。久しぶりに会うと、笑顔の華寧ちゃん、このまま笑顔が消えない子でありますよう願うところです。

## 戦争・貧困の無い世の中を

華寧の笑顔を見ていると、全世界に戦争の無い、また貧困の無い世の中をめざし、やれる限り社会運動に参加していきたいと改めて思いました。



なかなか笑わない華寧ちゃんが、ようやく笑ってくれました

